IATSS三十周年によせて

急がば回れ

池田義雄

1924年新潟県に生れる。46年東京帝国大学第二工学部航空機体学科改名物理工学科卒業。54年本田技研工業(株)入社、同研究所主任研究員。74年国際交通安全学会会員。79年同研究所定年退職、同学会顧問、日本工業大学教授。94年同大学定年退職。

最近歩く速度が遅くなったような気がする。少し歩くと息苦しくなって歩くのが嫌になってくる。こんな時に助けになるのが自転車である。かなり遠くてもそれほど疲れを感じない。そこで、最近はもっぱら自転車のお世話になっているが、公害もなく、適当な体力の使用、特に操作のためのバランス感覚が維持できることは大切なことである。もっぱら裏通りの通行がほとんどであるが「ひやり」とさせられることがしばしばある。いくつかの例をあげると以下の如くである。

(1)狭い路地からの飛び出し

信号のない見通しの悪い交差点、狭い少し鋭角に交差した路地からの飛び出しの場合である。女子学生や主婦に多い。なかには、「すみません」といって謝る場合もあるが、多くは逃げるように走り去ってゆく。

(2)交差点での出会い頭の衝突

これも信号のない交差点である。歩車道の区別はもちろんない。歩行者も自転車も最短距離を狙ってか、右側も左側も自由に動いているようである。左に曲がる時は予め左に寄せて一時停止や左右の確認もなく左折しようとする。当然タイミングが合えば、右側を通る歩行者、自転車と衝突する。右折の時も同じで、左側を通る人または自転車とぶつかることになる。たまには、顔見知りと会って苦笑い、ということになる。年齢には関係なさそうである。

(3)合図なしの左側追い越し

不思議に、少し左へ寄せようと思っている時にこれをやられるとひやりとする。いつか同じような記事が新聞に載っていた。その二日ばかり後に歩道で歩行者を脅かすようなベルはまかりならぬというご意見もみられたが、狭いスペースでの交通なので互いに譲り合う気持ちが肝要と思われる。公共の場におけるマナーの育成が重要と思われる。

(4)青信号でも危険

これは歩道のある4車線道路と見通しの悪い狭い道路の交差点で起きた事故であるが、もちろん信号はある。狭い道路で赤信号で停止していた車が青信号により緩やかな発進をしたところへ赤信号を無視したか、見落としたか、自転車がこともあろうに、センターライン側から飛び出して車に衝突したのである。自転車側の若者は車のボンネット上に乗り上げた後、路面にずり落ちたが、幸いに車の速度が遅かったことにより比較的に軽い打撲傷程度だったようである。

以上に述べた事柄はすべて前から知られていることばかりで誰もが理解していると思われるが、あまり守られていないということであろう。考えてみるとどれも見えないところ、見通しの悪いところで、こちらは相手を見ていないし、相手もこちらを見ていない。したがって交差点では「一時停止、左右の確認、徐行」が必要と思われる。「三つ子の魂百まで」と言われるが自己防衛のためにも幼時からのしつけが大切である。さらに事故を経験させるわけにはいかないが、シミュレーターによる訓練教育も必要と思われる。「急がば回れ」である。